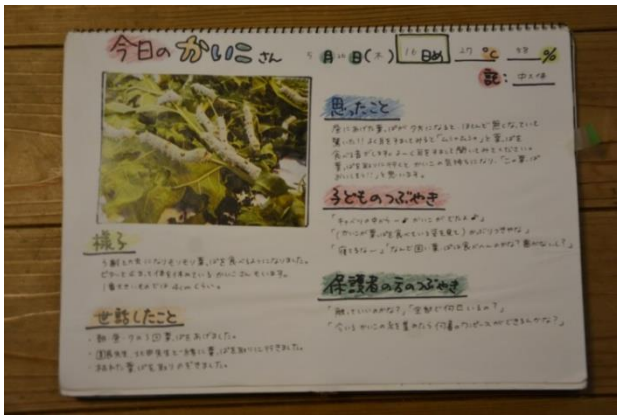
たかつかさ保育園は和装産業が栄えた「西陣」が近い事や園舎が京都工芸繊維大学繊維学部の跡地に建っていることなどから、前園長の発案で 15 年ほど前からたかつかさ保育園での蚕飼育が始まりました。そしてここ数年、職員の入れ替わりが盛んな時代を迎え、新しい職員集団で蚕飼育を引き継いでいます。そんな中改めて保育園で子ども達と蚕を飼育する意味を考えていきたいと思っています。
今回は４点の「蚕飼育のねらい」を定め、それらの実践や経験から見えてきた成果やこれからの課題を報告いたします。

１、子ども達と共に飼育し成長の様子を観察する。繭を使って制作をしたり、糸や綿が出来る過程を体験する。

朝夕、送迎時の子どもと保護者が必ず通過する保育園の玄関ホールで、春（５月中旬から６月下旬）と秋（９月下旬から 10 月下旬）の年２回の蚕飼育を行なっています。現在は約 500 頭を飼育しています。過去には約 3000 頭も飼育していた経験はありますが保育業務をしながらの飼育は職員の負担も少なくないので最近は 500 頭にしています。

卵から繭になるまで約１ヶ月、桑の葉を食べ続け、ウンチをします。大まかなお世話方法としては、桑の葉をあげる時に、食べ終わった桑の葉とウンチを処分することです。大きくなってくると密集度が高くなり病気が流行らないように小分けして、箱を増やします。３齢ぐらいになってくると蚕だけを別の場所に一度どけて、食べ終わった葉とウンチを処分して下に敷いている新聞紙が汚れていたら取り変えて新しい葉を置きます。眠と脱皮を繰り返し５齢になってくると大量の桑の葉を食します。葉を置いて、よその入れ物に葉を入れて振り返るともう無くなっているほどです。体が透き通って黄色くなってくると糸を吐き出し繭を作ります。その頃には蚕を蔟（まぶし）に置いて繭を作りやすい状況にします。それらの作業を子どもと一緒に保育士が行います。年長児は４齢ごろから牛乳パックで、２～３頭の蚕に名前つけてお世話をしています。そして繭が出来上がったら、子ども達とできた繭の数を数えます。

蚕飼育日誌



　インターネットや TV などと違い、毎日の生活の中に生き物（蚕）がいてその感触・匂い・音・など実体験としての積み重ねから得られる感覚・知識そして愛着があります。その中にはひとり一人の子ども達が不思議を感じ、発見があり、驚きがあり、そしてそこから生まれる他者との共感や対話は重要な意味を持つと考えます。

そうやって出来てきた繭を活用して様々な作品ができます。
どこかで買ってきた材料で何かができていくのではなく、それができていく過程を知って、その上で何かを作り完成して生活が豊かになることは、やはりこの時代に子ども達に伝えたいことの一つです。繭は様々な加工が楽しめる、極めて可能性が大きい材料と感じます。たかつかさ保育園は卒園時に卒園制作として作品を残します。ここ数年は身近にある繭を使って卒園制作を作っています。園内には以下のようなたくさんのシルクアートが飾られています。

2007 年度
卒園 卒業

かくまわたのパッチワーク
2012 年度 そう組卒業制作

繭のコサージュ
　卒園式では、これらの職員手作りコサージュを卒園児一人ひとりが胸につけて式に臨みます。

２、命をいただくことを子ども達と共に考える。
　繭の中には、数週間後には蚕蛾になる蛹がいます。しかし繭を糸繰りする場合や作品などに使う時は中の蛹は生かしておくことは出来ません。また基本的には病気などを心配して卵を産ませて生命をつなげていくことは避けています。しかしそれは大人の都合です。５齢になって名前をつけて小さい箱で飼育していると、もちろん愛着がわきます。様々な理由から生命の循環を続けていくことは難しく矛盾をはらんだ問いではありますが、子ども達を無視して勝手に判断はできませんので子ども達と話し合います。上記の病気のことなども説明しつつ、「ありがとう」「さようなら」命のことを教えてくれてありがとう、糸や作品を作らしてくれてありがとうと言ってお墓に埋めてあげようか、と子ども達と話します。大半の子は「かわいそう」と言い「もう一回育ててみたい」「育ててみないとわからへんやん」と話します。とても難しい問いでなかなか答えは見つかりませんが、普段の生活の中では考える機会が少ない「命をいただくこと」を考えられます。これからも子ども達と考え続けていきたいと思っています。

３、蚕に関わる地域の方々との関わりを広げ大切にする。
　蚕飼育を続けることでたくさんの方々と出会うことができました。保護者や地域の皆さんの中にも養蚕経験を持つ方もおられ、その思い出話を教えていただきます。「懐かしいな、昔は家の２階で飼育していた」「５齢になると桑の葉を食む音がワシャワシャ鳴って、雨が降っているようだった」と蚕を囲んで昔話で盛り上がることもあります。蚕を飼育しているおかげで様々なお話を聞いてつながることができました。

そして専門家の方々ともつながることができました。
伊豆蔵明彦さん（染色家）は、ご自身も蚕を飼育して繭を活かして素晴らしい作品を作り世界的に活躍されています。実際に交流を重ねる中で様々な繭の活用方法をたくさん教えていただき学ぶことができました。

今村利勝さん（無菌養蚕システム研究所）は繭の中にいる蛹でサプリを作られています。保育園でできた繭を研究所に送って蛹を買い取ってもらう時もあります。

最近は蚕種も分けていただいています。今村さんの研究所には養蚕業者から送られてくる繭がたくさんありますが、「保育園の繭は大きくて綺麗」と言ってくださります。たくさんの愛着や言葉が飼育環境に溢れているからではないかと想像しています。

服部芳和さん（織道楽塩野屋）は保育園や小学校での蚕飼育の普及に努められています。また繭加工に関する教室もされていて、先日もたかつかさ保育園の職員向けに研修会をしていただきました。

そして
「京都桑田村」との関わりは蚕が媒介となって地域での繋がりが大きく広がった大変嬉しい事例です。

2009 年度から卒園児のおじいちゃん山内輝男さんの紹介で京都市内の保育園から車で１時間半ぐらいの所にある南丹市美山町の施設で年長児の合宿を始めました。その後、美山町の集落支援員さんを仲介に美山町豊郷地区の方々と出会いました。お話をする中で保育園での蚕飼育や桑の葉の採集状況を知ってくださりました。それまでは近所の団地の桑の葉では足らず、近隣の小学校の桑の葉をもらいに回って集めて苦労をしていました。
そんな現状を知って３０a の休耕田を利用して桑畑を作ってくださることになりました。その活動は「京都桑田村」と名付けられ、2014 年 10 月の開村式にはぞう組が参加しました。
2016 年２月には NPO 法人の認可を受け設立の趣旨文では「高齢者が培った技術を活かし、蚕の飼育に必要な桑の木の栽培を始めとした環境を保全する事業を行うことにより高齢者等の元気作りに資すると共に地域集落の活性化に寄与することを目的とする」と記されています。

2017 年春の蚕飼育からは本格的に京都桑田村の桑の葉を供給していただいています。立派で美味しそうな桑の葉です。

また夏と秋に行う合宿保育では桑畑の近くにある豊郷公民館や古民家をお借りして「京都桑田村」の方々のお世話になって美山ででしか経験できない合宿に取り組んでいます。

秋の合宿の様子

脱穀体験

もんどり

ご飯作り

繭人形作り

夜の交流会

現在の桑畑

年長児ぞう組が卒園を迎える 3 月には桑の苗木を桑畑に植える「卒園植樹」行事も 2014 年から続いています。当日は保護者も一緒に京都桑田村まで行って植樹を行い、自分の名前が書いてある看板を立てて、みんなでお弁当を食べて交流をしています。卒園後も時々自分の桑の成長を見に行ったり、同窓会で京都桑田村を訪れたり、交流が続いています。

子ども達にとって「京都桑田村」が第二の故郷になるように願っています。
「蚕」を媒介につながりが広がり保育内容が豊かになったことは嬉しいことです。蚕という存在が、過去と今、田舎と都会、大人と子どもをつなげてくれました。それほど教材として魅力的な存在であることを改めて感じました。

またよりそのつながりが広がるように、たかつかさ保育園では小学校や保育園などの施設での蚕飼育をお勧めしています。別紙に「蚕飼育パンフレット　～かってみよう　いろんなたいけん　こどもらと～」も紹介しています。是非ご覧ください。

４、たかつかさ保育園の原風景として、園を特徴づける取り組みとする。

春と秋に玄関先で飼育をすることは先にも述べたように環境の一つとして子ども達の記憶となり、子ども時代の思い出に残って欲しいと思っています。そこから発展して、たかつかさ保育園のシンボルとしてもっとわかりやすく印象に残るように以下のような取り組みも始めました。

① 蚕のチェーンソーアート

2018 年度、大きいシンボルを作りたいと考えていて思いつきました。京都のチェーンソーアーティストを探し出し、美山の山から倒木を頂き、工房へ運び９割方はそこで作ってもらい、最後の仕上げを 11 月のバザーでみんなの前で仕上げてもらいました。たかつかさ保育園の大事なマスコットになっています。

② 蚕の陶芸作品

チェーンソーアート作品完成後に、ちょうど美術教室の先生をされている卒園保護者が保育園に来られました。その時にお願いをすると快諾して下さり、こんなにリアルな作品を作って下さいました。

③ 銅板の蚕

在園児のおじいちゃんで板金屋さんがおられ、板金技術を駆使してこんなにカッコいい作品を作って下さいました。

どれも、たかつかさ保育園の「園宝」として大切にしています。

15 年近く保育園という場所で蚕飼育を続けてきたからこそ、これらのことが積み重なってきました。「蚕」という教材から、より豊かな保育内容を子ども達や地域の方々と創造していけることは本当に嬉しいことです。今後もこの輪を広げながら継続をしていきたいです。

2019 年　たかつかさ保育園